

占星術で使用される三種の時刻について  
—Bādarāyaṇa *Praśnavidyā* 4–5 を手がかりに—

小林 史明

1 序

古代インドの文献には、占術の先駆形ともみなせる豫兆や呪術に關する記述が早くからみられる<sup>1</sup>。特定の時刻の天體の配置にもとづいて占斷する占星術は紀元後に盛んになる。インドの占星術書は数多いが、最も古いと想定されるのが、Sphujidhvaja (3世紀頃か)の *Yavanajātaka* である<sup>2</sup>。yavana 「ギリシャ人」の語が題名に入ることからギリシャ系の人物が著したものと思われる。ギリシャ・ローマ文化は紀元前からインドに傳來し、紀元後には特に天文学、占星術の分野においてインド文化に大きな影響を及ぼした。初期のインド占星術書としては他に、Mīnarāja (4世紀)の *Vṛddhayavanajātaka*, Varāhamihira (6世紀)の *Br̥hajjātaka* 及び *Laghujātaka*, Kalyāṇavarman (9世紀)の *Sārvalī* などがある。

占星術(天文学)は計算(gaṇita)、ホロスコープ占星術(horā)、前兆(samhitā)の三分野からなる。これらの内、ホロスコープ占星術には、誕生占星術(jātaka)、質問占星術(praśna)、時間占星術(muhūrta)の三分野がある。それぞれ出生時(及び受胎時<sup>3</sup>)、質問時、行為の實行時の天宮圖(ホロスコープ)を使用して占斷するものである。誕生占星術は生まれた人の壽命、將來などを、質問占星術は失せ物探しなどを、時間占星術は結婚、戦争などの開始時刻による吉凶を卜する。

このうち質問占星術(praśna)は、占星術師が依頼者(「質問者」)から何か占って欲しいことを「質問」された時に、その時点の黄道12宮における天體の配置を圖示した天宮圖を作り、それにもとづいて占斷するものである。依頼(「質問」)時に起きた諸々の現象にもとづいて占斷する場合もある。Pingreeによれば、質問占星術は、誕生占星術とギリシャの開始占星術(katarkhē)<sup>4</sup>ともとづいた、インドにおける發明である(PINGREE [1997: 36])。質問占星術を論じる文献は3世紀頃の *Yavanajātaka* までさかのぼる。*Yavanajātaka* は題名の通り誕生占星術(jātaka)を中心とするが、第52章から第72章が質問占星術にあてられ、質問占星術の最初期の文献とみなせる。質問占星術に關する占星術書としては他に、Bādarāyaṇaの *Praśnavidyā*, Varāhamihiraの息子 Pr̥thuyāśas (6世紀)の *Ṣaṭpañcāsikā*, 占星術師としても注釋者としても有名な Utpala (10世紀)の *Praśnajñāna* などがある<sup>5</sup>。本稿で取り上げる *Praśnavidyā* 『質問占星術の知識』は、質問占星術を主題とする文献としては最も古いものの一つである。

<sup>1</sup> 古代インドにおける占術の始まりについては PINGREE [1997: 31–38] を参照。

<sup>2</sup> *Yavanajātaka* の年代については MAK [2013] を参照。

<sup>3</sup> 誕生占星術の著作では受胎時についても一章を當てるのが一般的である。

<sup>4</sup> インドにおける時間占星術(muhūrta)に相當する。

<sup>5</sup> 質問占星術については PINGREE [1981: 110–114] を参照。

## 2 論點

ホロスコープ占星術は、特定の時点における天の各宮において、諸天體がどの位置にあり、各々がどの様な関係にあるかを示す天宮圖を使用する占術である。従って、ある占術の依頼について、どの時点の天宮圖を使用するかは重要な問題である。質問占星術 (*praśna*) とは質問時の天宮圖を使用する占術である。一方、誕生占星術 (*jātaka*) は出生時の天宮圖を使用する占術である。この両者は異なる場合に使用される技法であり、論書においても別々に説かれるのが通例である。出生時刻が未知の場合に誕生占星術で占断する場合は、質問時の天宮圖をそのまま使用するのではなく、質問時の天宮圖から出生時刻を再建する方法である *naṣṭajātaka* 「失った出生時 [の天宮圖]」と呼ばれる技術を使用すると規定される<sup>6</sup>。しかし、実際の占星術書では、受胎時、出生時、質問時の三種の異なる時刻の天宮圖が、相互に通用可能であるとも説かれることがある。

これまでの研究では、これら三種の時刻に通用される記述については十分に検討されて来なかった。本論文では、*Praśnavidyā* 4-5 と、それに對する Utpala 注とを手がかりに、占星術で使用される三種の時刻 (受胎時、出生時、質問時) について論じる。

本稿で取り上げる *Praśnavidyā* 『質問占星術の知識』は 76 詩節からなる。Utpala 注によれば、もともと Bādarāyaṇa 作の *Samhitā* と名付けられる作品があり、*Praśnavidyā* はそのうちの一章であったとされる<sup>7</sup>。Utpala の注釋があるため、Utpala の在世した 10 世紀以前の作品であることは確實である。更に、Varāhamihira の、占術や豫兆一般に關する著作である *Bṛhatsamhitā* の中に Bādarāyaṇa の名が見られる<sup>8</sup>。この Bādarāyaṇa が *Praśnavidyā* の著者と同一人物と假定すると、同書は *Yavanajātaka* に次いで古い質問占星術の文獻になる<sup>9</sup>。別人であるとしても、Utpala の *Praśnajñāna* に先行する数少ない文獻のひとつであり、初期の質問占星術を知る上で重要な作品である。

## 3 本論

### 3.1 *Praśnavidyā* における「質問時の天宮圖」と「出生時の天宮圖」

*Praśnavidyā* 4-5 は質問時の天宮圖を出生時の天宮圖の代用として使用する事を説く。ホロスコープ占星術では、同じ人物について占断する場合には當然、目的に応じて異なる時刻の天宮圖を使用する。異なる時について説かれた規則を、自由に他の時に適用できるのであれば、複数の時について別々の規則を定める必要がなくなることになる。

<sup>6</sup> *naṣṭajātaka* については *Yavanajātaka* 52.1-5 や *Bṛhajjātaka* 26 章を参照。

<sup>7</sup> *Praśnavidyā* p. 4: ācārya bādarāyaṇaḥ svasamhitāyām ekam adhyāyam lokānugrahārthaṁ cikīrṣuḥ 「バーダラーヤナ先生は自らの *Samhitā* において一章を世界の愚恵のために作らんとして [第 1 偈を説いた]」。

占星術の分野では、*samhitā* の語は一般に前兆による占術の意味で使用される。一方で、*samhitā* の語を 3 分野の總體として使用することもある (*Bṛhatsamhitā* 1.9)。Bādarāyaṇa の *Samhitā* は、恐らく占星術の總體としての *samhitā* であった。

<sup>8</sup> *Bṛhatsamhitā* 39.1 : vṛścikavṛṣapraveśe bhānor ye bādarāyaṇenoktāḥ / grīṣmaśaratsasyānām sadasadyogāḥ kṛtās ta ime // 「太陽が天蠍宮と金牛宮とに入る時 (霜降と穀雨とに相當する) に、夏と秋との穀物 (麥などと米などと) の、吉不吉の [惑星] 配置が バーダラーヤナにより 説かれた。それらが [以下のように私により] 作られた」。

<sup>9</sup> Bādarāyaṇa の著作としては他に *Bādarāyaṇīyayātrā* が現存する。これは出征占星術 (*yātrā*) を主題とする文獻であるが、未出版である (PINGREE [1970-1994: vol. 4, 239-240])。

しかし、次の二偈は、出生時の天宮圖の代用として質問時の天宮圖を使用して良い、と語る。

*Praśnavidyā* 4-5 及び Utpala 注

praśnajātakayor munimatena sāmyam āha /

**agr̥hītajātakasya tu pr̥cchākālo 'pi janmasamayasya /  
bhavatīti kamalayonir vadati tathāpare munayaḥ<sup>10</sup>//4//**

**agr̥hītajātakasyālikhitajanmasamayasya pr̥cchākālah** praśnasamayo 'pi jan-  
majātakatulyo **bhavati / iti kamalayonir** brahmā kathayati / **tathā** tenaiva  
prakāreṇāpare **munayo** 'nye paramarśayas tatsamayam jātakatulyam **vadanti<sup>11</sup> /**  
tathā cōktam ācāryavarāhamihireṇa /

“janmany ādhāne praśnakāle ce”ti<sup>12</sup> //4//

質問占星術と誕生占星術とが聖者達の見解によれば等しいことを説く。

一方、出生圖が得られない者にとって、質問時 [の天宮圖] もまた出生時の [天宮圖] になると蓮から生まれた者 (ブラフマー) は語る。同様に他の聖者達は [語る]。//4//  
出生圖が得られない者にとって [即ち] 出生時 [の天宮圖] が書かれない者にとって、質問時 [即ち] 質問の時刻もまた、出生時の出生圖と等しいものとなる。この様に蓮から生まれた者 [即ち] ブラフマーは語る。同様に [即ち] 同じ仕方により、他の聖者達 [即ち] 他の最高の聖仙達は、その時刻 [の天宮圖] が出生圖と等しいと語る。また同様にヴァラーハミヒラ先生により説かれた。

「出生時にも、受胎時にも、質問時にも」 (*Laghujātaka* 5.2) と。//4//

atraivācāryam āha /

**janmasamaye yad uktaṃ śubhāśubhaṃ divyadr̥gbhir ācāryaiḥ /  
pr̥cchākāle 'pi nr̥ṇāṃ tad eva bhavatīti vijñeyam //5//**

**ācāryaiḥ** sāstrakārair nārāyaṇoktavasiṣṭhaparāśarabhr̥tibhir **janmasamaye**  
jātakakāle **yac chubhāśubhaṃ** kathitaṃ janmalagnavaśāt **nr̥ṇāṃ** puruṣāṇām  
praśnodyatānām janmaphalatulyaphalaṃ **bhavatīti vijñeyam** jñātavyam / **itīśabdo**  
niścayārthe //5//

他ならぬそこで、先生について説く。

神的な視力を持つ先生達により出生時において吉不吉として説かれたこと、他ならぬそれが質問時においても人々について知られるべきである。//5//

<sup>10</sup> *Praśnavidyā* は āryā 韻律で書かれた作品である。āryā は第 1 パーダ、第 3 パーダが 12 マートルー、第 2 パーダが 18 マートルー、第 4 パーダが 15 マートルーからなる韻律 (mātrāchandas) である。この詩節は第 4 パーダが 13 マートルーであり、2 マートルー少ない。vadanti tathā apare munayaḥ 「同様に他の聖者達は語る」と讀めば 15 マートルーとなる。

<sup>11</sup> 本文の vadati を、注釋では vadanti と讀む。

<sup>12</sup> veti の誤りか。

先生達により〔即ち〕ナーラーヤナから生じた<sup>13</sup>ヴァシシュタ、パラージャラなどの論書の作者達により、**出生時刻について**〔即ち〕出生時について、出生時の天宮圖によって吉不吉として説かれたことが、人々にとって〔即ち〕質問を始めた人間達にとって、出生時の果と等しい果があると理解されるべきである〔即ち〕知られるべきである。「と (iti)」の語は決定の意味である。//5//

*Praśnavidyā* のこの二偈によれば、出生時と質問時（占断を依頼した時）との二種の異なる時刻について作られた天宮圖が、常に相互に通用可能であることになる。実際に、Utpala は *Praśnavidyā* 30 に對する注で、*Praśnavidyā* 4 の規定にもとづき、出生時を質問時と解釋する。

janmarkṣaṃ janmarāśis tātkaḷikalagnaṃ ity arthaḥ / yata uktam / agrhītajātakasya  
prcchākālo janmasamayāḥ / iti /

「出生時の星」とは、出生時の宮、〔即ち〕その時（質問時）の上昇宮との意味である。なぜなら〔次の様に〕説かれたから。「出生圖が得られない者にとって、質問時が出生時である」と。

*Praśnavidyā* 4-5 は、質問占星術について説く論書の冒頭近くに置かれた詩節であることから、質問占星術の有用性を誕生占星術に對比することで示す意圖があると想定出来る。ただし、上掲の様に、Utpala は *Praśnavidyā* 4 に對する注の末尾で、出生時と質問時との二つのみならず、出生時、受胎時、質問時の三種の時について述べる *Laghujātaka* 5.2 を引用する。これについては後述する。

### 3.2 *Vṛddhayavanajātaka*

出生時、受胎時、質問時の三種の時について規定する例として、Mīnarāja（4世紀）の *Vṛddhayavanajātaka* 3.1 がある。

ādhānaprcchodbhavasāmyam uktaṃ phalaṃ yatas tasya parīkṣaṇārtham /  
yogān vicitrān pravādāny ato 'haṃ cihnair yathā jantuviniścayaḥ syāt //

受胎と質問と出生との等しさが〔賢者達により〕説かれた。それから果が〔知られる〕ところの、それ（天宮圖）の吟味のために、私はこれから様々な〔惑星〕配置を説明しよう。諸々のしるしにより人の〔運命の〕決定がある様に。//

この詩節は、三種の時における天宮圖が、それぞれ果を知るために使用され、有効性に關して等しいことを述べたものである。*Praśnavidyā* 4-5 の様に、質問時の天宮圖を出生時の天宮圖の代用として使用することを説くのではない。しかしながら、古くから三種の時が並んで言及されることがあったことが、この詩節から分かる。

<sup>13</sup> 刊本は *nārāyaṇokta-* であるが、校訂者の提案に従って *nārāyaṇottha-* と讀む。しかし、何れも意味は明らかでない。あるいは、*nārada-* などの誤りかも知れない。

### 3.3 *Brhajjātaka, Sārāvalī*

出生時と受胎時とについては, Varāhamihira (6世紀) の *Brhajjātaka*, 及び Kalyāṇavarman (9世紀) の *Sārāvalī* において, 兩種の時についての規定が通用可能であると規定される.

*Brhajjātaka* 4.22 (受胎の章)

udayati mṛdubhāṃṣe saptamasthe ca mande yadi bhavati niṣekaḥ sūtir abdatrayeṇa /  
śaṣīni tu vidhir eṣa dvādaśe 'bde prakuryān nigaditam iha cintyaṃ sūtikāle 'pi yuktyā //

土星の宮の [ナヴァ] アンシャが上昇しつつあり, 土星が第7位にある時に, もし受胎が生じるならば, 出生は3年間かかる.

一方で, 月において, この条件は12年目に [出生を] 爲す. ここ (受胎の章) で述べられたことは, 出生時においても適切に考慮されるべきである. //

*Sārāvalī* 8.62 (受胎の章)

ity ādhānavidhānaṃ prasūtisamaye 'pi yojayed yogyam /  
ādhāne yan noktaṃ prasūtivihitaṃ tad api cintyam //

以上の様に, 相應しい受胎時の規則を出生時においても使用するべきである.

受胎時において説かれず, 出生時において定められたこと, それも又 [受胎時において] 考慮されるべきである. //

年齢を計算する際に, 出生時からと受胎時からとの二つの方法が紀元前から見られ<sup>14</sup>, これら二種の時については通用が認められる素地が古くからあったとみられる<sup>15</sup>.

### 3.4 *Horāsāra*

一方, 受胎時と質問時との等價性については, やや時代が下るものの, Pseudo-Prthuyasās の *Horāsāra* 4.23ab に規定がある.

niṣekakāle yat proktaṃ phalaṃ praśne tad ādiśet /

受胎時に説かれた果報, それを質問時に示すべきである.

この規定の後には胎児の性別の区別に關する規定が述べられる (*Horāsāra* 4.23cd–26ab). 男児が生まれるか女児が生まれるかは, 占星術師に對する典型的な質問であるが, 質問の性質上, 受胎時だけでなく質問時の天宮圖を使用して回答することが出来るのは自然である<sup>16</sup>.

<sup>14</sup> 一例として, *Āśvalāyanagrhyasūtra* 1.19.1–2: aṣṭame varṣe brāhmaṇam upanayet //1// garbhāṣṭame vā //2// 「[出生から] 8年目にバラモンを入門させるべきである. 或いは胎児 [の受胎] から 8 [年] 目に。」など.

<sup>15</sup> ギリシャ占星術においても, Ptolemaios は受胎時が人生の始まりとみなして占星術に使用され得る事について論じる (*Tetrabiblos* 第3巻, Loeb 版 pp. 222–224).

<sup>16</sup> 質問占星術で子供について占断する例として *Brhathathāślokaṃgraha* 18.9 がある. praśnādigranthasārajañśaḥ cittam buddhvā tayor asau / ādideśa sphuṭādeśo bhāvinam guṇinaṃ sutam // 「質問占星術を始めとする書物の精髓を知る彼 (ジャイナ教出家者の Sānu) は兩人 (子供の出来ない夫婦) の心を知って, 良い性質を伴った息子が生じると, 明確な教示を伴って教示した.」

*Horāsāra* 5.50 では、出生時と質問時とについても、両者が並置される。

balī kendropagaḥ saumyo nidhaneśavivarjitaḥ /  
ariṣṭayoganāśāya praśne vā janane 'pi vā //

質問時であれ出生時であれ、吉星がケन्द्रラにあり、力があり、第 8 位の支配者と合でないならば、死の豫兆 (ariṣṭa) の [惑星] 配置の減びとなる。 //

### 3.5 Utpala 注にみられる三種の時

先に引用した *Praśnavidyā* 4 に對する Utpala 注には、ヴァラーハミヒラ作 *Laghujātaka* 5.2 が引用される。

tathā cuktam ācāryavarāhamihireṇa / “janmany ādhāne praśnakāle ce”ti

また同様にヴァラーハミヒラ先生により説かれた。「出生時にも、受胎時にも、質問時にも」(*Laghujātaka* 5.2) と。

*Praśnavidyā* 4 本文の意圖は、質問時の天宮圖の有用性を述べるために、出生時の天宮圖との果の等しさを述べることであった。しかし、この引用では出生時、質問時のみならず受胎時も含まれる。

*Laghujātaka* は Varāhamihira (6 世紀) 作の誕生占星術 (jātaka) に關する文獻である<sup>17</sup>。

*Laghujātaka* 5.2 (受胎の章)<sup>18</sup>

saurāṁṣe 'bjāṁṣe vā candraḥ saurānvito 'tha hibuke vā /  
śānto dīpo janmany ādhāne praśnakāle vā<sup>19</sup>//

月が、土星の [ナヴァ] アンシャにあるか、水生生物の [ナヴァ] アンシャにあるか、土星と合であるか、第 4 位にある時、出生時に、受胎時に、又は質問時に、燈明は静まってある。 //

この詩節の後半部と同様の文言が、Prthuyāśas (6 世紀) の *Ṣaṭpañcāśikā* 1.3 に對する Utpala 注にも見られる。*Laghujātaka* からの引用である可能性がある。

prcchatām janmato veti / prcchatām prcchāsamaye narāṇām, janmato vā jāyamānānām /  
... / tathā “janmany ādhānakāle<sup>20</sup> praśnakāle ve”ti //

「質問する者達に、或いは出生時から」とは [次の意味である]。質問する人々について質問時において、或いは生まれる者達について出生時から [との意味である]。(中略) 同様に [次の様に説かれた]。「出生時に、受胎時に、又は質問時に」と。

<sup>17</sup> *Laghujātaka* にも Utpala の注釋がある。

<sup>18</sup> *Laghujātaka* 5.2 に並行する記述として、*Yavanajātaka* 6.14, *Bṛhajjātaka* 5.17, *Sārāvalī* 9.27 がある。これ等は何れも出生時に關する章である。

<sup>19</sup> 刊本では第 4 パーダを ādhāne cen na ravidṛṣṭaḥ とするが、JACOBI[1872; 19] に従って改める。東京大學総合圖書館所藏の寫本では、第 2 パーダで candraḥ saurānvito thavā hibuke, 第 4 パーダで ādhāne praśnakāle vā と讀む(矢野道雄「*Laghujātaka* 研究」(未出版)による)。

<sup>20</sup> ādhāne の誤りか。

この他にも Utpala が出生時、受胎時、質問時の 3 種の時を並べて述べる例が見られる。その例として、*Brhājātaka* 4.11（受胎の章）に対する Utpala 注では以下のように述べる。

atha niṣiktasya niṣekakālāj jātasya janmakālād ubhayor api praśnakālād vā puṁstrī-  
vibhāgajñānaṃ śārdūlavikrīḍitenāha

さて、受胎した〔胎児〕について受胎時から、生まれた者について出生時から、或いは両方ともについて質問時から、男女の区別の知識を śārdūlavikrīḍita 韻律によって説く。

*Brhājātaka* 4.11 の本文は何れの時刻とも規定せず、この詩節が受胎の章にあることから、受胎時についての規定であると想定される。しかし、Utpala は注の中で受胎時のみならず、出生時と質問時とをも含める。生まれる前に子供の性別を知るために、受胎時、又は質問時の天宮圖を使用して占断するのは自然であるが、生まれた後で出生時の天宮圖を使用して性別を卜する必然性は餘り無いと推測される<sup>21</sup>。

この様に、Utpala は本文に説かれなくても、異なる時刻に適用して良いとみなして注釋することがある。その根據として利用する規定が、*Laghujātaka* 5.2 であった。

また、*Praśnavidyā* 5 は *Yakṣyeśvamedhīyātrā* の中で、Utpala により引用された可能性がある<sup>22</sup>。従って、Utpala は *Praśnavidyā* 4-5 も同様に、同じ規定を複数の時刻に適用出来る根據として使用した可能性がある。

#### 4 結論

受胎時と出生時とは、何れも人生の始まりとみなし得るため、占星術において同様に利用されるのは自然である。また、質問占星術は誕生占星術よりも成立が新しく、技法が體系化される前には誕生占星術の技法を流用する必要があった。従って、実際の占術の場では、占術の性質に応じて、同じ規則を受胎時、出生時、質問時の異なる時刻の天宮圖に適用したものと想定される。

*Praśnavidyā* 4-5 は、実際の占術におけるこの様な自由な行爲について、質問占星術の著作であることもあり、質問占星術の效用をやや誇張しつつ述べたと推測出来る。一方、後世の注釋者である Utpala は、*Praśnavidyā* 4 に對する注において、三種の時刻（受胎時、出生時、質問時）全てに適用される *Laghujātaka* の規定を論據として引用する。Utpala は、明確な論書の規定こそないものの、受胎時、出生時、質問時の規定を互に流用して良いとみなした様である。

<sup>21</sup> 何らかの事情で性別不明者の天宮圖を使用して占断する場合は別である。

<sup>22</sup> *Yakṣyeśvamedhīyātrā* 2.27: janmasamaye yad uktam śubhāsubhan nirviśeṣam ācāryaiḥ / pṛcchākāle nṛṇāṃ tad eva bhavātīti vijñeyam // ただし、第 2 パーダで *Praśnavidyā* 5 の divyadr̥gbhiḥ の箇所を nirviśeṣam と讀む。

*Yakṣyeśvamedhīyātrā* は、本来は Varāhamihira の *Brhadyātrā* (6 世紀初め) の別名である。*Brhadyātrā* と共に Pingree により出版された *Yakṣyeśvamedhīyātrā* の刊本では、*Brhadyātrā* の本文と、Utpala 注 (10 世紀) と推測される韻文とが、一緒に傳承された寫本にもとづいて校訂された。Pingree は *Yakṣyeśvamedhīyātrā* 2.27 を *Brhadyātrā* の本文とみなすが、Utpala 注内における *Praśnavidyā* からの引用とみなすべきである。

(一次文献)

*Āśvalāyanagr̥hyasūtra*

*Āśvalāyanagr̥hyasūtrabhāṣyam of Devasvāmin*. Ed. K. P. AITHAL. Adyar Library Series 111. Madras, 1980.

*Praśnavidyā*

*Bādarāyaṇa's Praśnavidyā with the commentary of Bhaṭṭotpala*. Ed. J. S. PADE. The M. S. University Oriental Series 10. Baroda, 1972.

*Brhājātaka*

Ed. SĪTĀRĀMA JHĀ. Vārāṇasī, 1974.

*Br̥hatkathāślokaṣṅgraha*

Ed. Félix LACÔTE. Paris, 1908–1929.

*Br̥hatsaṁhitā*

Ed. KR̥ṢṆACANDRA DVIVEDĪ. Sarasvatībhavana Granthamālā 97. Vārāṇasī, 1996.

*Br̥hadyātrā*

*Br̥hadyātrā: Yakṣyeśvamedhīyam of Varāhamihira*. Ed. David PINGREE. Tamilnāḍu, 1972.

*Yakṣyeśvamedhīyayātrā*

*Br̥hadyātrā* を見よ.

*Yavanajātaka*

*The Yavanajātaka of Sphujidhvaja*. Ed. David PINGREE. Harvard Oriental Series 48. Cambridge, 1978.

*Laghujātaka*

Ed. VĀSUDEVA. Vārāṇasī, 1986.

東京大學総合図書館所蔵寫本, 南アジア・サンスクリット語写本データベース (<http://utlsktns.ioc.u-tokyo.ac.jp/>) Matsunami New No. 326.

*Vṛddhayavanajātaka*

Ed. David PINGREE. Gaekwad's Oriental Series 162–163. Baroda, 1976.

*Ṣaṭpañcāśikā*

Ed. SATYENDRA MIŚRA. Kashi Sanskrit Series 287. Vārāṇasī, 1993.

*Sārāvālī*

Ed. SUBRAHMAṆYA ŚĀSTRĪ. Bombay, 1907.

*Horāsāra*

*Horasara of Prithuyasas (Son of Varahamihira)*. Ed. SUBRAHMAṆYA ŚĀSTRĪ. Bangalore, 1949.

(二次文献)

JACOBI, Hermann

[1872] *De Astrologiae Indicae, 'Horā' Appellatae Originibus*. Dissertatio Philologica. Bonn.



MAK, Bill M.

- [2013] “The Date and Nature of Sphujidhvaja’s *Yavanajātaka* Reconsidered in the Light of Some Newly Discovered Materials.” *History of Science in South Asia* 1: 1–20.

PINGREE, David

- [1970–1994] *Census of the Exact Sciences in Sanskrit* Series A, Volume 1–5. Memoirs of the American Philosophical Society 81, 86, 111, 146, 213. Philadelphia.

- [1981] *Jyotiḥśāstra : Astral and Mathematical Literature*. A History of Indian Literature Volume 6, Fasc. 4. Wiesbaden.

- [1997] *From Astral Omens to Astrology : from Babylon to Bīkāner*. Serie Orientale Roma 78. Roma.

P. V. KANE [1948] “Varāhamihira and Utpala: their works and predecessors.” *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society* 24–25: 1–31.

ROBBINS, F. E.

- [1940] *Ptolemy: Tetrabiblos*. The Loeb Classical Library. London.

〈Keywords〉 占星術, praśna, Bādarāyaṇa, Utpala

こばやし ふみあき 東京大学大学院博士課程

On the Three Moments of Time Used in Ancient Indian Astrology  
— Bādarāyaṇa's *Praśnavidyā* 4–5 —

KOBAYASHI, Fumiaki

There are three moments of time at which an astrologer casts horoscopes: the time of the client's conception (*ādhāna*), the time of birth (*jātaka*), and the moment of query (*praśna*).

The *Praśnavidyā* of Bādarāyaṇa is one of the oldest treatises on interrogational astrology in India (5th century A. D.?). In interrogational astrology, the astrologers answer the questions on the basis of the horoscope of the moment of query. The moment of query is naturally different from other two “moments” for astrology, i. e., the time of conception and that of birth. However, in *Praśnavidyā* 4–5, Bādarāyaṇa states that the horoscope cast at the moment of query yields the same results as the horoscope of the time of birth.

Conception and birth may both be regarded as the starting point of human life. Consequently, the same astrological rules are applicable to the time of conception and the time of birth. Interrogational astrology was originally based on genethliacal astrology. Before the systematization of interrogational astrology, the rules of genethliacal astrology would have been often applied to the moment of query. Therefore, in practice, an astrologer was able to apply the same rules to the three moments: the time of conception, birth, and query.

In *Praśnavidyā* 4–5, Bādarāyaṇa perhaps somewhat exaggerates the scope of interrogational astrology. But his statement would not be illogical, if we assume such license of astrologers. On the other hand, Utpala, a commentator in the 10th century, in his commentary on *Praśnavidyā* 4, cites a rule of *Laghujātaka* which is applied to the three moments of time (conception, birth, and query). He seems to regard the rules on these three moments as interchangeable.